



桜井孝身の絵の世界 ●深野 治

7

その黒い画面は夜の星空を思わせる。黒はしばしば否定と攻撃のシンボルであるけれども、桜井の第三期においてはそうではない。われわれが夜空を眺めるとき、はるかな無限への憧れに胸が満たされるように、桜井の黒い画面は明るく深い。暗黒とは正反対の、宇宙への飛翔である。人間の現実的繁栄を噛み破り、普遍への思いに到達した深みに他ならない。

そして、赤い裸体は？ 私は、桜井孝身が発見した、この不思議な赤色が、桜井の今日までの表現の最も豊かな結晶だと信じる。

赤色は、人種でいえば、インディアン肌の色である。赤い肌をしたインディアンの存在を、人種のルツボであるアメリカ社会において考えてみよう。彼らは、アメリカの先住民族でありながら、開拓時代いらい差別と圧迫の中におかれ続けている。彼らの社会的存在の、新しい発見は、ビートニク、ヒッピーズ運動の発展とブラック・パワーの高揚とともに誘発されてきた。そして、運動の大衆化によって、白色も黄色も黒色も赤色も同じ人間なのだという存在認識がじわじわと浸透してきた。もとより人種問題の全面的解決にはほど遠いのが現実である。しかし、一般には単なる風俗現象であるかのようにいわれるヒッピーの展開は、最たる主流において人間解放の大きな叫びだったのである。

世界は差別のない大衆のもの—この強烈な人間認識、世界観に到達したとき、桜井の画面に

登場する人物は、赤い裸身を持って立ち現われてきた。人々は、おおらかにうたい、ゆうゆうと行進していく。懐疑のかげりを、人間相互の信頼によって乗り越えていくために、手と手を取り合い生きていく。生きていくことは素晴らしいこと、一人一人がどんなにさびしくとも、いや孤独と寂寥に打ちひしがれる小さな存在だからこそ、人間生きることは素晴らしい。桜井の絵は、そのことを、もっとも真摯に語りかけてくる。